

## 研究ノート

# キリスト教宣教と唱歌成立

——研究史の批判的概観 その1——

安 田 寛

## はじめに

二〇〇二（平成一四）年六月十日に発行された『岩波キリスト教辞典』にある「唱歌と讃美歌」という目新しい項目は、いろいろな意味で注目に値する。「はじめに」で編集者一同は、「欧米の文学・美術・音楽・映画を楽しむ際にもキリスト教の知識の有無によって見方が大きく変わることも考慮し、各所にさまざまな知的好奇心を刺激する記述も盛り込んだ。」と述べているから、それにあたる項目なのかもしれない。

「唱歌と讃美歌」は、中村理平が一九九〇（平成二）年十月に日本大学文学研究科日本史専攻に博士論文を提出した時から数えて、辞典発行までのこの十二年弱の間に蓄積されたばかりの新しい研究成果にもとづいて書かれている。「知的好奇心を刺激する」ためとは言え、『岩波キリスト教辞典』が「唱歌と讃美歌」を項目として取り上げたことは、評価も十分に定まっていらないこと、目に触れやすい著書だけでなく、「山口芸術短期大学紀要」、当人文科学研究所内の共同研究の一つである「第三研究 宣教師文書研究」の研究発表レジュメと当研究所の紀要「キリスト教社会

問題研究」、国際基督教大学キリスト教と文化研究所の紀要「人文科学研究（キリスト教と文化）」、「弘前大学教育学部紀要」といった一般には、そして分野が異なる研究者にはあまり目に触れない研究誌上で、十二年弱という短期間にめまぐるしく進展した新しい研究であること、したがってその動向も一般にまだ十分に浸透してないのが現状であることを考えたとき、かなり思い切った決断だと思えるのである。

問題提起のため項目を内容毎に箇条書きにして引用させていただきたい。

- 一、一八八二―八四年に文部省が刊行した『小学唱歌集』には讃美歌の曲が一六曲採用されている。
- 二、明治政府は音楽教育を開始するにあたって、ボストン公立学校音楽監督 L・W・メイソンを招聘した。
- 三、一九世紀アメリカでは音楽教育とキリスト教が深く結びついており、
- 四、日本政府の依頼を受けた当時の音楽教育の重鎮である E・トゥルジェーは伝道の意志を持つメイソンを派遣した。
- 五、日本政府は唱歌の歌詞のみに注目したが、トゥルジェーらは曲の採用を第一義に考えていた。
- 六、当時宣教の二大ツールはリードオルガンと讃美歌であったが、
- 七、その二つは『小学唱歌集』と学校に常備されたオルガンに姿をかえて
- 八、学校教育に導入され、日本の音楽教育の根幹部を形成するに至った。

なお、編集方針として「文責を明らかにするために署名原稿とした」とあり、項目「唱歌と讃美歌」には「手代木俊一」の署名がある。

ここに簡潔かつほぼ適切に述べてある、二と三を除いた最新の研究成果に関する研究史を概観することが本稿の目

のである。表題で、たんに概観としないで、批判的概観としのは、このあと研究史を概観するとき、特に研究の優先権あるいは優先順位（プライオリティ）が問題になってくるからである。これには、この研究を推進した研究者の關係、ことに中村理平と安田寛の關係、研究で先行した二人に対する手代木俊一の關係が複雑で、相互の影響關係を裁断し、第三者がプライオリティを判断することが極めて困難であることが關係している。しかしこの困難を克服して、プライオリティを確定しないまま、この後、この分野の論文を書くことが難しくなっているという現状がある。そういう状況がいかにして生じたかについては、これから述べる研究史で自ずと明らかに becoming 考へるが、研究上のこうした障害を取り除くことも、この研究ノートの目的の一つである。

研究の今後の発展のためにも他の研究者、あるいは讚美歌研究者、キリスト教史研究者から、わたしが見落としていること、間違っていることがあればぜひご指摘、ご批判をいただきたいと思う。<sup>②</sup>

## 一 中村理平とトゥルジェー

一九九一（平成三）年十月に日本大学（文学研究科日本史専攻）に提出、翌年三月に受理された課程博士号請求論文「洋楽導入過程の研究―先達者の軌跡―」によって、イーベン・トゥルジェーというそれまで日本ではまったく言っていないほど無名だった一米国音楽家を研究領域に持ち込んだのは中村理平であった。博士論文が、一部加筆され、『洋楽導入者の軌跡―日本近代洋楽史序説―』と改題されて上梓されたのは、一九九三（平成五）年二月十八日であった。

中村が、「アメリカに居ながらわが国の音楽教育界で果たした役割は、ほとんど語られていないが非常に重要で

ある<sup>③</sup>」と述べた人物、E・トゥルジェー (Eben Tourjée, 一八三四—一八九一) は、日本ではまったく無名であつても、アメリカでは、ボストンにあつて現在でもアメリカ有数の音楽学校であるニューヨークランド音楽院 (New England Conservatory of Music) を一八六七年に創設し、十九世紀のアメリカの音楽教育に大きな影響力を持ち、キリスト教布教活動における音楽の効用を強調した音楽家としてアメリカではよく知られている。

日本の近代音楽史との関係で言えば、トゥルジェーは、ニューヨークランド音楽院の教師でもあつたL・W・メーソン (Luther Whiting Mason, 一八一八—一八九六) を日本へ派遣する教師として推薦し、およそ二年半に渡るその唱歌教育活動を支援し、その後の日本近代音楽の在り方を決定したことで、日本の音楽教育の黎明期に深く関与した人物であつたことを、「メーソンの日本招聘に重要な役割を演じ、メーソンを通じてのちのちまで日本の音楽関係者に密接な協力体制を計つた<sup>④</sup>」と見事なまでに看破したのが中村であつた。

研究にトゥルジェーを登場させた中村の功績がどれほどのものであつたかは、これをきつかけに、メーソンが文部省で行つた唱歌教育の仕事とキリスト教宣教との関係、メーソンの日本招聘とそこの活動を支援したトゥルジェーの目的とキリスト教宣教との関係が、はじめて研究の俎上の載せられたことから分かるであろう。表題にある、キリスト教宣教と文部省の唱歌成立との関係の研究史を中村の研究からはじめる理由がこれである。

## 二 越川美都子の先駆的研究

中村の論文と同じ時期に、卒業論文のためか、注目されることが少なかったが、当研究領域にとって先駆的で独創的な研究が発表された。一九九一 (平成三) 年十二月五日に東京芸術大学学理科に提出された越川美都子の「明治初

期讃美歌研究―『七一雑報』の記事を中心に―」である。

副題にある通り、一八七五年に創刊された関西の会衆派宣教機関紙であった『七一雑報』の記事と『植村正久と其の時代』(第四巻)にある植村正久の回想記を使って、文部省お雇い音楽教師メーソンが日本の宣教活動に協力したことを、当時としてはあまりに独創的知見であったためか控えめな口調ながら、讃美歌研究の視点から越川はじめて証明してみせた。

越川は論文で、「讃美歌が唱歌教育に与えた影響という点での研究が今後必要となると思われる。」<sup>(5)</sup>とこの後に続く研究を見事に予見し、引用参考文献として、手代木俊一が当研究領域にはじめて提示した論文「横浜と唱歌―明治初期讃美歌について」<sup>(6)</sup>を挙げる目配りをみせている。

ところで、当人文研究所第三研究に参加している手代木は、フェリス女学院大学附属図書館山手分室長を退職後、近年、キリスト教宣教が唱歌に与えた影響について精力的に研究を公にし、キリスト教史学会で「學術奨励賞」<sup>(7)</sup>を、立教大学から「第十四回辻莊一・三浦アンナ記念學術奨励金」を受賞するなど高く評価されている研究者であるが、中村理平の遺著『キリスト教と日本の洋楽』と「この研究分野で双璧となす」<sup>(8)</sup>とされ、受賞にも貢献した一九九九年十一月十日発行の著書『讃美歌・聖歌と日本の近代』で、越川の研究をそっくり使いながら、越川からの教示だと言っただけで、越川の論文には一言も触れないことには首を傾げざるをえない。<sup>(9)</sup>

メーソンが宣教に関係していたことについて、越川は、植村正久牧師の「今昔の感」を論拠として引用して、「植村正久は、メーソンは『基督教の熱信者で、其の日本の小学児童に歌わせた唱歌の多くは、讃美歌などの譜其のまま若くは作り更へたものであった』と記しており、メーソンと『七一雑報』との間になんらかの交流があったことも考えられる」<sup>(10)</sup>と述べたことは、先駆的な卓見であると評価しなければならない。<sup>(11)</sup>

一方、手代木は、「牧師植村正久はメーソンの『音楽と宣教』<sup>(12)</sup>について次のように述べている」と、越川が引用した「今昔の感」を再びを引用する際（ただし越川より多めに引用しているが）、越川の研究に触れることはない。<sup>(13)</sup>

この後、手代木は、「メーソンとキリスト教、そして唱歌、讃美歌とともに発達・進歩している様子が牧師の立場をとおして述べられている」と、越川の研究を補うものとして、牧師植村正久の「ふるき日の事ども」から直接引用する。

しかし、「ふるき日の事ども」は、外国の音楽家（メーソン）を雇い入れて文部省が教えはじめた唱歌の「多くは米国に行われる讃美歌と同じ譜であった」と、すでに安田が、「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」で「明治期を通じて唱歌集は讃美歌を重要なレパートリーとし続ける」ことの論拠の一つとして、越川が引用している「今昔の感」とともに引用している。<sup>(14)</sup>

安田の論文が発行されたのは一九九二年一月で、越川が論文を提出したのは一九九一年の十二月である。この時点ではお互いの研究を知らずに、同じ興味から植村牧師の回想に注目してことが、後になってみると分かる。

メーソンが日本の宣教活動に協力したことの論拠として、越川が『七一雑報』から引用したものは、その第六巻第二十六号、一八八一（明治十四）年七月一日の記事で、「東京基督教演説会予定論題」と題されているものである。これについて、越川は、「翌一八八一年七月には、東京基督教演説会の予告に『音楽は博士メーソン氏唱歌は男女諸生徒なるよし』とあり、三月に来日したメーソンが讃美歌（または唱歌）の指揮をとったことが報じられている。<sup>(15)</sup>」と述べた。

これに対して手代木は、「メーソン自身もキリスト教の集会に参加していた。『七一雑報』には次のような記事が見られる。」と、越川が引用した記事を全文掲載し、越川が引用した箇所には傍点を付し、「傍点筆者」と断っている。

その注(133)では記事は「越川美都子氏にご教示いただいた」と記すだけで、彼女の論文には言及しない。<sup>(15)</sup>

さらに越川は「もう一つの記事は、小学唱歌集の編纂及び音楽取調掛伝習生の募集についてである。」と述べて、「東京にて先頃公立になりし音楽の学校は音楽教師米人メーソン氏を御雇入に相成」ではじまる『七一雑報』（第六卷第三十二号）一八八一（明治十四）年八月十二日の記事を引用してから、「この記事が掲載された一八八一年八月は、メーソンや伊沢修二による『唱歌掛図』が完成し、それにもなつてあらたに『小学唱歌集』（初編）刊行の見込書が文部省に提示されたところである。まだ音楽取調掛が伝習生を開始した翌年である。まだ公にされていないこの唱歌集の内容がここで具体的に例に出されていることから、唱歌教育に関わりのある者あるいはその事情をよく知るものがこの記事を書いたのではないかと推測される。」と述べた。<sup>(17)</sup>

越川に対して、手代木は、「東京にいるはずのメーソンのお雇い外国人としての仕事が関西に報告されている」と述べてから、やはり越川からのご教示だとして、越川と同じ記事を引用し、「この号は『小学唱歌集』初編が刊行された明治十五年より前に出ている。にもかかわらず使われている曲や歌詞などの内容が具体的に記されているだけでなく、オルガン製作などにも言及している。」と述べる。<sup>(18)</sup>

メーソンが宣教に関係したことについて越川が典拠にしたものと同じ資料を引用し（さらに一点ほど伊沢修二の「メーソンを弔ふ」を挿入しているが、これについては後に詳述する）「メーソンにおいては『音楽』と『宣教』は不可分であることは明らかである」と結論する。<sup>(19)</sup>ここに述べたことは、メーソンに関して宣教との結びつきを最初に明らかにした越川からの引用であると、どうしてはつきり書かないのか、疑問符だけが残る。<sup>(20)</sup>

さらに手代木は、「メーソンにおいては『音楽』と『宣教』は不可分であることは明らかである」と結論した後、「これらの資料は特に入手が困難というわけではなかったが、今まで音楽とキリスト教を、すなわち唱歌と讃美歌を

別々に研究していたため音楽と宣教の結びつきが見過ごされていたのである。」と、まるで、音楽（唱歌）と宣教との結びつきを見逃さなかったのは自分をはじめてである、かのような発言をすることで、越川との関係をさらに分かりにくくしている。手代木が「今まで」と書いたのは一九九九年三月（平成十一年十一月十日）に刊行された著書で（転記元の「十九世紀アメリカの宣教と音楽」にしても一九九九年三月）、最初に唱歌と宣教との結びつきを述べた越川の論文が提出されたのは、一九九一年（平成三年）年十二月五日である。安田の「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」が出たのは一九九二年（平成四年）年一月である。手代木が「今まで」と書いた箇所は、「越川と安田の研究以前は」と書かないと、研究経過が読者に正しく伝わらない。

かつて調査で訪れた越川は、卒業論文のコピーと卒業論文に使った「七一雑報」の記事等のコピーを手代木が室長をしていたフェリス女学院大学附属図書館山手分室に寄贈した。その際にご教示があつたのであれば、むしろそのように親切であつたからこそ、手代木は著書で、「（『七一雑報』の）記事は越川美都子氏にご教示いただいた。」<sup>(21)</sup>と書かずに、越川の論文を引用参考文献として挙げなければいけない。そうしないと、越川の仕事なのか手代木の仕事なのか曖昧になる。つまり越川の教示による手代木の仕事とみられかねないし、越川の仕事を手代木が引用したことが隠れるからである。次に、先行研究に到達する便宜を読者が失うからである。それに何より越川の先駆的仕事を無視するという非礼な結果になるからである。

実際、専門家でない限り、手代木の著作を読んで、「越川美都子氏にご教示いただいた。」という情報から、越川の「明治初期讃美歌研究―『七一雑報』の記事を中心に―」に到達することはかなり困難であろうし、到達してからも、本文五八頁の越川論文から手代木が引用し参考にした箇所を特定するにはそれなりの時間を要する。<sup>(22)</sup>



### 三 野上俊之の研究

さて、研究者の誰もが思ってもみなかったトウルジェーをひっさげての中村のこの鮮やかな登場には先駆者がいた。野上俊之は一九八〇年に書いた「L・W・メーソンの音楽教育観について」の中で、メーソンはなぜ日本に来たのかという問題に答えて、メーソンの「日本招聘への要因」として六点ほど指摘し、その三番目に、『日本公使ヨリ日本国立学校に音楽ヲ開設スル為ニ最モ適當ノ人ヲ推薦スベシトノ委託ヲ受ケシ時』ボストン府トルジェー氏が、メーソンを推薦した<sup>(23)</sup>と、トウルジェーの推薦を理由として挙げた。

野上が引用した資料は、トウルジェーが一八八五（明治十八）年のニューオーリンズの万国博覧会の折りに一記者に語ったインタビュー記事を転載した『日本教育会雑誌』の明治十八年七月の第二十一号に掲載された記事であった。野上の先行研究と彼が引用した記事に再び注目し、トウルジェーの推薦の「重要性に言及していない<sup>(24)</sup>」と野上を批判し、メーソンが日本に来たのはトウルジェーの関与が決定的であったと、大胆な一步を記すことに中村はいささかの躊躇もみせなかった<sup>(25)</sup>。

中村はまず、ボストンで「なぜメーソンは日本人に興味を抱き、接触して唱歌教育を試みようとしたのであろうか」と問題を提起した。

後にお雇い教師として来日することになるメーソンが一八七六（明治九）年にフィラデルフィアで開催された万国博覧会で日本展示を見た後、なぜ、あれほど執拗に日本人留学生を捜し、自宅に招いて唱歌を試してみるまでのことをしたのか、動機が不明である、というわけである。

この疑問に対して、「メーソンの良き理解者で、同志でもあるニューイングランド音楽院長、イーベン・トゥールジェによる次の証言が強い説得力を持つ。」と、「○ボストン府トルジェー氏ノ学校ニテ音楽ヲ教フル利害ノ問題ニ係リタル談話（一千八百八十五年三月十七日北米ニューオルリヤンス府刊行時事共和国合併新聞抄訳）」『日本教育会雑誌』（第二十一号・明治十八年七月）一二七―一二八頁より」として、次のように引用した。

余かつて日本公使より日本国公立学校に音楽唱歌を開設するために最も適當の人を推薦すべしとの委嘱を受けしとき、ここに最好適なる知己の一人博士エルダブリュー、メーソン氏をもつてこれに答たり。該公使欣悦してその言を要れ、ついに我が親友をもつてこの道に充てたり（カタカナをひらがなに、漢字を一部ひらがなに直した）

「イーベン・トゥールジェによる次の証言」に付した注で中村は、日本側の資料の「原紙は山口芸術短期大学助教授安田寛氏がワシントンの米国議会図書館における追跡調査で発見、筆者は複写をいただいた」とし、さらに「訳文に相当する原文は以下の通りとして原文を次のように掲載した。<sup>(26)</sup>

「When I was applied to by the Japanese embassy to recommend the best man for introducing the culture of vocal music into the public schools of Japan, I told them there was but one man of my acquaintance who could accomplish it, and that was Prof. L. W. Mason. They thankfully accepted my suggestion, and transferred my friend to the field.」『TheTimes=Democrat』(New Orleans Democrat and New Orleans Times) March 17 1885.

中村の引用を再び引用する際<sup>(27)</sup>、手代木は、「トゥールジェーによるメーソン日本派遣の日本側資料は『ボストン府トルジェー氏ノ学校ニテ音楽ヲ教フル利害ノ問題ニ係リタル談話』（『日本教育会雑誌』第二十一号、明治十八年七月三十一日）にあらわれる」と書く。そのあと、手代木は中村が注記した内容を、「これは新聞『ザ・タイムズ』デモク

ラート・アンド・ニューオーリンズ・タイムズ』（一八八五年三月十七日号）に掲載された記事で、ニューオーリンズでのトゥルジェーの演説が翻訳されたものだ<sup>(29)</sup>と本文に書き、それに注記して、「The Times=Democrat and New Orleans Times, March 17, 1885」とすでに中村にある情報をくり返し、中村がすでに安田から「筆者は複写をいただいた」と書いている箇所を「安田寛氏にご提供いただいた。」と書き換える<sup>(30)</sup>。

この後で、手代木は「トゥルジェーの存在は日本では今まであまり取り上げられてこなかった」とすでに時代錯誤である発言を行ってから、<sup>(31)</sup>ようやく、中村は「前述資料を紹介した後に次のように述べている」と、中村から続きを直接引用する。

なお、手代木は、記事について、「ニューオーリンズでのトゥルジェーの演説が翻訳されたもの」と中村の思い違いを引き継いでいるが、オリジナルのタイトル「A Talk with Dr. Tourjée, of Boston, on the subjects,」からまはつきりしているように、記事は新聞記者がトゥルジェーに行ったインタビューである。

#### 四 派遣依頼の時期と日本公使

先に紹介した注の中で中村はさらに次のように述べた。

「安田氏はさらに、ボストンのニューヨーク音楽院での調査で、トゥルジェーの子息（正しくは甥）が著した『The Life Story of EBEN TOURJÉE』の文中（一七二―一七三頁）にトゥルジェーが日本の公使にメーソンを紹介したのは一八七二（明治五）年の八月初旬であった旨の記述を見だし、メーソン獲得の先鞭は当時の日本駐米代理公使森有礼が行った可能性が強いことを筆者にご教示下さった。」と述べている。

これを手代木は次のように書き換えた。

「安田寛氏によるレオ・エーベン・トゥルジェーのフォー・ゴッド・アンド・ミュージック——ザ・ライフ・ストーリー・オブ・エーベン・トゥルジェー」(一九六〇)の中に書かれている次の記述によつて、日本政府、トゥルジェー、メーソンの関係が明らかになり、この分野の研究が一気に進んだ。明治五(一八七二)年トゥルジェーに日本の音楽教育を相談したのは森有礼だった(安田寛氏説)。<sup>(35)</sup>

その後、中村が指摘した『The Life Story of EBEN TOURJEE』の一七二—一七三頁を引用しておいて、その注で『For God and Music: The life story of Eben Tourjée (Los Angeles, 1960)』安田寛氏にご教示いただいた。と書く。この注で手代木は無駄なくり返しと、あいかわらずの「ご教示」を書かずに、中村から引用したことを書かなければならなかったのである。それに安田が手代木に「ご教示」した内容は、かなり以前に論文に記されている。<sup>(36)</sup>

手代木の引用の仕方があまりに手が込んでいるため、その説明も煩雑にならざるを得なかったが、彼が「トゥルジェーによるメーソン日本派遣」について書いた箇所(一八六頁—一八八頁)は、実質、中村の該当箇所(四八二頁—四八五頁および注七六)の引用である。<sup>(37)</sup>なぜなら、ここでも越川の引用に見られたのと同じやり方で、手代木は、「記事」、「原紙」、「トゥルジェーの甥による伝記」と中村とまったく同じ資料を同じ順序で使つて、メーソンを日本に派遣したのはトゥルジェーであり、トゥルジェーに派遣を要請した日本公使は森有礼である可能性が強い(ただし、手代木では断定表現になっているが)と、中村と同じ結論を書いているからである。

ただし、厳密には、「トゥルジェーによるメーソン」(の)「日本派遣」という手代木の表現は正しくない。<sup>(38)</sup>メーソンを招聘したのはあくまで日本政府であり、トゥルジェーは、中村が正確に表現しているように、「日本政府筋の要望

があつて、(中略)メーソンを(中略)推薦していた」のである。<sup>(37)</sup>

さて、問題の資料、『The Life Story of EBEN TOURJÉE』であるが、タイトルは「FOR GOD AND MUSIC」で、サブタイトルが「The Life Story of EBEN TOURJÉE, FATHER OF THE AMERICAN CONSERVATORY」で「By Leo Eben Tourjée」と書かれてある。表題から目次までが七頁、本文が三〇七頁のタイプ原稿である。ニューヨークランド音楽院附属図書館のアーカイヴズに保管されてあるのは、そのコピーである。脱稿時期は不明であるが、一九六〇年頃と推定されている。

著者の父で、一八四三年十一月二十二日に生まれたJeremiah Hayden Tourjéeは、E・トゥルジェーの弟である。つまり著者は叔父の伝記を著したのである。<sup>(38)</sup>

著者は、「謝辞と出典」で、「この著書は私の父で、トゥルジェー博士の弟、ジェレミアが集めた切り抜き、書簡、資料に負っている。もう一つの重要な出典は、トゥルジェー博士生誕百年祝賀として、一九三四年にマサチューセッツ州ロウエルの市民新報に連載されたF・W・コバーンの記事である」と述べていることは、いちいち出典を記していない本文の信憑性の判断にとって意味のあることである。

一九九一年の十月のはじめにニューヨークランド音楽院のアーカイヴで入手した経緯を説明しながら、この資料を使った安田の最初の発表は、手代木が注(188)で記しているように、一九九一年(平成三年)十二月九日の国立音楽大学教育センターで行われた特別教育期間の講座であつた。<sup>(40)</sup>しかし、この発表は、すでに活字になって公にされていることを手代木は注記すべきである。活字になっている講演から自分の講演「明治期讃美歌の文化史的意義」概観と問題提起」だけを著書で「序章 讃美歌と日本文化」と改題して再録しているのであるから、なおさらそうである。<sup>(41)</sup>

## 五 手代木の追跡調査と『新グロヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」

「日本政府筋の要望があつて、トウルジェーがメーソンを音楽教師として推薦した」ことを明らかにした野上と中村の研究は日本の研究者には新鮮で、衝撃的でした。ところが、「トウルジェーがメーソンを推薦した」の部分はやや異なる表現でアメリカでは普通に語られていたことであつた。

『新グロヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」には「一八七六年に全米音楽教員協会 (Music Teachers National Association) が設立され彼 (トウルジェー) は最初の会長を務め、音楽院の教員であるメーソンによつて一八七九年から一八八二年にかけて日本の学校に西洋音楽教育を導入する手配を開始した。」と記してある。<sup>(43)</sup>

『グロヴ音楽辞典』、『グロヴ・アメリカ音楽辞典』のヘーベン・トウルジェーの項目の短い記述にも、トウルジェーによるメーソン派遣は書かれている。<sup>(44)</sup>として、その典拠を特定するため、中村と安田の研究に基づいて、項目「Tourjée, Eben」にある参考文献リストを追跡調査したが、トウルジェー研究に対する手代木の仕事のほとんど全てである。

すでに詳しく述べた「FOR GOD AND MUSIC」は参考文献リストの六番目に見つけることができる。参考文献リストの二番目に挙げられているE・I・サミュエルの「奇跡の人生、イーベン・トウルジェーの生涯」<sup>(45)</sup>がも一つの典拠であることを手代木が追確認した。

「トウルジェーによるメーソンの日本派遣の事実はごく当然のこととしてアメリカ側では受け止められているようである。E・I・サミュエルの『驚くべき経歴、イーベン・トウルジェーの生涯』(中略)では次のように述べられ

ている<sup>(46)</sup>」とし、その後にサミュエルから当該箇所を翻訳して掲載する。

その際、手代木は注(192)で、それとは明記しないで、『新グローヴ音楽事典・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」の参考文献リストの2番目に挙がっているE・I・サミュエルを直接指示する。しかし、彼自身がかつて「これはグローヴ音楽事典のビブリオグラフィーから追っていった時にあつた論文です<sup>(48)</sup>」と述べている。

さらにサミュエルのトゥルジェー伝については、その内容、それが典拠にした資料、レオ・E・トゥルジェーが著したトゥルジェー伝との比較について、すでに詳しい議論がなされているが<sup>(49)</sup>、これについても手代木は沈黙している。手代木は自分の記述と『新グローヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」との関係を曖昧にし、不透明にしている。そうではあっても、『新グローヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」にある「(トゥルジェーは)音楽院の教員であるメーソンによって一八七九年から一八八二年にかけて日本の学校に西洋音楽教育を導入する手配を開始した」という記述の典拠が参考文献リストの二番目にあるE・I・サミュエルのトゥルジェー伝であることを確認し、サミュエルの当該箇所を日本に紹介し、トゥルジェーが日本公使にメーソンを推薦した時期は一八七二年の夏で、日本公使は森有礼であると考えられる、とする安田の説を補足したことは手代木の仕事である。

トゥルジェー伝記を書いたサミュエルについて補足しておくと、彼女は、マウント・ホリヨーク大学を卒業し、キユーバで二年間働いた後、音楽院に勤務し、英語と心理学を教えた。

## 七 ジェニー・コンドンの回想記

項目「Tourjée, Eben」にある、トゥルジェーはメーソンが日本の学校に西洋音楽教育を導入するための手配をは

じめた、という記述の典拠になったものとして、手代木は参考文献リストにない資料を二つ著書で提示した。

一つはジェニー・コンドンが書いたもの<sup>(52)</sup>“and afterwards they sent to Dr. Tourjée to send someone out to teach music and he sent Dr. Luther Mason”という内容である。手代木が使っている資料は、安田が一九九二年十月七日にニューヨーク音楽院附属図書館アーカイヴズで入手した資料であることは安田が残している調査メモから分かる。しかし、これはもとより第三者が客観的に知りうることではないが、手代木が第三章「音楽と宣教」に掲載したアメリカ側の資料は、偕成会（中略）の平成二年度学術奨励金の交付を受け、フェリス女学院大学研修員としてアメリカで調査・研究したものである」と述べているので、一応補足しておく。

この資料は二頁目が欠けた全四頁のタイプ原稿である。安田はすでに三頁の後半から四頁の前半の部分を摘出して原文で紹介した<sup>(53)</sup>。

手代木は、それをそのまま翻訳し、トゥルジェーがメーソンを派遣した典拠として著書に載せ<sup>(54)</sup>、その注ではいきなり原資料に言及するのみである。したがって、この場合も、先行研究との関係が完全に断ち切られ、研究の優先順位を判断する材料を読者に一切提供しない態度に徹している。

そのような態度のせいでもないだろうが、資料を「Letter, 1907, to Miss Jennie Condon」としたかつての安田の間違いをそのまま引用して、手代木は『ジェニー・コンドン嬢宛書簡』（一九〇七年十一月）では次のように書かれている<sup>(55)</sup>としてゐる。しかし、全文を読めば分かるとおり、正しくは、一八五九年にニューヨークでトゥルジェーの生徒であつたコンドンが、後年トゥルジェーについての個人的思い出を書き残したものである<sup>(56)</sup>。



## 八 コバーンの記事について

手代木が取り上げているもう一つの資料は、「東京出身の目賀田種太郎は八月三十日に『日本の教育関係』と題して講演を行った。目賀田が会期中に現れたことは、トゥルジェー博士が二年半後に彼の夏期教授陣の一人、ルーサー・W・メーソンを日本に派遣し、音楽を改良するという事業に一八七七年にすでに関心を持っていたに違いないことを示すものである」というフレデリック・コバーンの新聞記事である。

これも第三者が客観的に判断できることではないが、この連載記事は、安田の調査メモによれば、安田がレオ・イーベン・トゥルジェーのトゥルジェー伝の巻末にある参考文献によって、一九九二年十月五日にボストン・パブリックライブラリーでマイクロフィルムから複写し、手代木にも一部複写し提供したものである。

安田は、「これは一九三四年五月二十一日から六月二十日まで連載されたトゥルジェー伝の六月十二日分である。ニューイングランド音楽師範学校とも言うべきThe New England Normal Musical Instituteの一八七七年度に行われた目賀田種太郎の講演とトゥルジェーのメーソンを日本へ派遣する計画との関連について述べている」という解題を付して「Frederick W. Coburn, "Eben Tourjée, "Lowell courier-Citizen, June 12, 1934」<sup>(57)</sup>として紹介した。

これに対して、手代木は「フレデリック・W・コバーン著の新聞記事「イーベン・トゥルジェー」『ローウェル・カウリアー・シチズン』（一九三四年六月十二日）を紹介する」と<sup>(58)</sup>と、コバーンの記事から直接引用したことにして、安田がすでに紹介した記事を著書に載せている（ただし、安田が論旨に関係がない部分として省略した部分を省略せずに）<sup>(59)</sup>。

その際、手代木は、「一八七七年の七月下旬と八月上旬の学会」と翻訳しているが、「The Institute of late July and early August, 1877」とは「学会」ではなく、「New England Normal Musical Institute」のことだ。全米から参加した音楽教師や音楽学生を対象とした夏期講座である<sup>(60)</sup>。さらに細かいことを言えば、手代木は「八月三日に東京から訪れた目賀田氏が『日本における教育に関して』という講演を行った。」と翻訳しているが、この表現だと、目賀田は八月三日に東京から訪れた、と取られかねないが、八月三日は目賀田が講演を行った日である。ただし、日本にある目賀田自筆資料によれば、講演の実際の日は十一月三日であった<sup>(61)</sup>。

## 九 トウルジェーがメーソンを推薦した理由

日本政府筋からの要請にこたえて、トウルジェーがメーソンを推薦したことが明らかになると、次に、なぜトウルジェーはメーソンを選んだのか、日本政府に音楽教師として推薦する人物にメーソンを選んだ理由は何か、に興味が移る。

これに対して中村は、トウルジェーは「メーソンのよき理解者で、同志<sup>(62)</sup>」であり、「メーソンの授業参観記を雑誌に発表するなどメーソンの能力を高く評価していた」と指摘した<sup>(63)</sup>。さらに、後で日本語に翻訳されて、日本の音楽教育に重大な影響を与えたメーソンの音楽掛図は第一集と第二集が一八七〇年に、第三集が一八七一年にトウルジェーが院長を務めるニューイングランド音楽院から出版されたことを指摘した<sup>(64)</sup>。ニューイングランド音楽院の便覧を調べてみると、当時メーソンは音楽院の教授団に名前を連ね、公立学校の音楽教育を担当していた<sup>(65)</sup>。

中村の説から更に踏み込んで、トウルジェーがメーソンを選んだことには宣教目的があった、とする説を安田はし

ばしば述べている。

「トウルジェーと会見たころの森は日本でのキリスト教の解禁のために活発に活動していた時期であった。日本が近代化するには、日本はキリスト教国にならなければならぬと強く信じていたに違いない森にとって、唱歌の日本導入もまた日本のキリスト教化の線に沿って考えられていたに違いない。(中略)キリスト教の布教に熱心な二人の日米の両人物によって、メーソンを日本へ派遣することが計画されたのである。」<sup>(86)</sup> というのがその最初であった。

「メーソンと森、森にメーソンを薦めたイーベン・トウルジェーらの間には、当然というか、いわずもがなの了解があつたにちがいない。それは、日本の学校にキリスト教の歌を普及させる、というものだ。」と述べたあと、トウルジェーの音楽教育思想を示すものとして、E. Toujée, Lecture, Music in its Relations to Common School Education, repr. in L. E. Toujéeを典拠として、<sup>(87)</sup>「メソジストに属する活動的なクリスチャンでYMCAのリーダーだったトウルジェーは、教会の礼拝に参加させる準備のために、学校に音楽を導入すべきことを説いていた。」とも指摘した。安田は、さらに同じことを「メーソンの来日の目的には、トウルジェーの意向が強く反映していると思われる。一語で言えば、キリスト教の宣教に貢献する、というものである。」<sup>(88)</sup>と述べた。

これに対して手代木は、「彼(トウルジェー)のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メーソンの日本への派遣が計画され、そして実現したわけである」<sup>(89)</sup>とか、「トウルジェーは海外伝道に意欲を燃やしていた。クリスチヤンの森有礼は後述するトウルジェーの『キリスト教の基準に沿った文明化』という提言をそのまま受け入れたであろう。」<sup>(90)</sup>とか述べるだけで、その根拠を明らかにすることはなく、いずれの箇所にも安田の研究への言及はない。

資料が、いつ頃書かれたものか、どのような人物がどのような意図で書いたものかなど、考証することなしにトウルジェーの海外伝道思想をただただ強調する手代木の説を批判すれば、それはひるがえって安田が自分自身の過去

(一九九三年から一九九四年まで)の説を批判する奇妙な事態に陥ることになるのであるが、トゥルジェーが日本公使にメーソンを推薦した時点で、本当に日本の音楽教育を宣教に役立てようとしたのかについては、もう少し慎重な検討があってもいいが、これについては後で述べる。

## 十 メーソンの宣教意図

次に、音楽教育を日本のキリスト教化に役立てることをトゥルジェーが意図したと仮定するなら、その彼が選んだメーソンに日本で宣教に協力する意図があったかどうかが問題になってくる。

これについて来日以前にメーソン自身が語った資料は一つしかない。それは、現在、東京芸術大学附属図書館所蔵の目賀田種太郎宛メーソン書簡である。<sup>(2)</sup>一八七八年二月二日の日付を持つこの書簡をメーソンの来日とキリスト教宣教との関係という視点から取り上げたのは安田が最初である。

「キリスト教が唱歌の導入の障害になったことを証言する資料は残念ながら今のところ一つしかない。(中略)その中でメーソンはこう書いている。『あなたのお国の人々が我々の音楽はもっぱら伝道事業と結びついたものと考えておられるかもしれないことははっきりわかります』。メーソンのこの返事から察すると、この手紙に先立つメーソン宛の手紙で、目賀田はおそらくキリスト教が唱歌導入の最大の問題点であると述べていたにちがいない。しかし、その手紙はまだ見つかっていない。メーソンの手紙を多く保存しているメリーランド大学にはないという私信をハウ女史から受け取った。あとは、メイン州バックフィールドの遺族が持っている可能性が高いがまだ調査できていない。<sup>(3)</sup>」

後に同じ資料を同じ視点から取り上げて手代木は次のように言う。

「メーソンは唱歌教育導入と音楽による宣教を同時には行えないことを来日以前に薄々感じていたと思われる。トウルジェーの提言を知っている目賀田種太郎に対し気遣いを見せ、自らの宣教の意思と日本の現状の葛藤を感じさせる書簡を目賀田に明治十一（一八七八）年二月二日付で書き送っている。

あなたの国民が私たちの音楽は例外なく宣教事業と結びついているというお考えをいだかれるかもしれないことは、私にはよく分かります。でも、思いになりませんか。私たちの音楽は、社会でも家庭でも、とりわけ日本的な習慣とうまくやってゆけるかも知れないのです。うまくやれば、それを改良できるかも知れません。（安田寛訳）

目賀田の書簡に対する返事の中の文章であるが、その書簡の存在が不明なのでメーソンがどうしてこのような文章を書いたのか判断できない。しかし、くだけた文体の中に宣教が日本政府との契約に障害になりそうなこと、唱歌教育だけを伝え、宣教はしないとうけとれるように書き、しかしどうしても来日したいというメーソンの気持ちがあらわれている。多少の妥協もやむなしといったところだろうか。<sup>(74)</sup>

注でメーソン書簡を直接指示し、安田との関係は、「訳文は安田寛著『唱歌と十字架』（音楽之友社 平成五〔一九九三〕年六月）、二二二頁」と訳文だけを引用したかのように書き、安田の先行論文には触れない。<sup>(75)</sup> この注は「訳文は」ではなく、「訳文も」とすべきものであろう。メーソンの宣教意図についてはあとで詳しく述べる。

## 十一 トウルジェーとアメリカ音楽教育界

『岩波キリスト教辞典』は「日本政府の依頼を受けた当時の音楽教育の重鎮であるE・トウルジェーは伝道の意志を持つメイソンを派遣した。」と、トウルジェーがメイソンを日本に派遣する手配をはじめた頃、彼がアメリカ音楽教育界で影響力の大きい人物であったことに触れているが、それについては、すでに述べた『新グローヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」は、「彼（トウルジェー）の活動は公立学校での音楽教育促進にもおよんだ。全米音楽会議として一八六九年にボストンで開催された音楽教師の最初の全国集会を提唱したのは彼であった。一八七六年に全米音楽教員協会が設立されたとき、彼は最初の会長を務めた」と具体的に述べている。出典は、参考文献リストの四番目に挙げてあるビルジュ（Edward Bailey Birge）の『合衆国公立学校音楽教育史』である。<sup>(76)</sup>

手代木はトウルジェー伝の記述の中で、上記を引用して、「トウルジェーは当時の音楽教育界の重鎮で、アメリカの音楽教育者の組織であるMusic Teachers National Associationの初代会長にもなっている」と述べる。それに続けて、「この時の副会長の一人にL・W・メイソンがいる」と記している。<sup>(77)</sup> 出典がないので、どこから引用したものは不明であるが、これについてはハウがすでに詳しく述べている。<sup>(78)</sup>

『岩波キリスト教辞典』は「日本政府の依頼を受けた当時の音楽教育の重鎮であるE・トウルジェーは伝道の意志を持つメイソンを派遣した。」と記すが、日本政府から教師推薦の依頼を受けたトウルジェーが、「当時の音楽教育の重鎮である」という出典は、ビルジュの『合衆国公立学校音楽教育史』とS・W・ハウの博士論文である。<sup>(79)</sup>

## 十二 トウルジェーの経歴

ところで、トウルジェーを当時のアメリカ音楽教育界の重鎮とする手代木の記述は、トウルジェーの経歴を述べた件に出てくるものである。<sup>(80)</sup> この経歴について注(178)で手代木は「エーベン・トウルジェーの略歴は、次の四点による」と、『新グロヴ音楽・音楽家事典』と『新グロヴアメリカ音楽事典』の項目「Tourjée, Eben」の他、レオ・イーベン・トウルジェーのトウルジェー伝、新聞の死亡記事の四点を典拠としたとあるが、手代木が述べるトウルジェーの経歴の大部分(三十二行中二十七行)が、実は『新グロヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」を書き写しただけのものであことは、手代木の記述と『新グロヴ音楽・音楽家事典』を翻訳した『ニユーグロヴ世界音楽大事典』(第十一巻)の項目「トウルジェ、エバン」と比較してみる一目瞭然である。以下「」の中が事典を引用した手代木の記述である。

(一八三四年六月一日ロードアイランド州ウォリック生、一八九一年四月十二日マサチューセッツ州ボストン没) アメリカの音楽教育家、合唱指揮者、オルガニスト。父エビニーザーと母アンジェリア(・ボール)の息子として生まれる。父方の家系はユグノー教徒であった。

「エーベン・トウルジェーは、一八三四年アメリカ、ロードアイランド州ウォウイックでユグノーの家系の子として生まれる。」

エバンはイースト・グリニッジ神学校で一般教養を、プロヴィデンスで音楽を学ぶ。プロヴィデンスで楽譜店の店員になり、その頃に《The Keynote》誌を編集、出版した。これは一八五五年に《Massachusetts Musical Journal》誌にな

った。

「プロヴィデンスで音楽を学び、一五歳でプロヴィデンスの音楽ストアの店員になる。この間雑誌『キー・ノート』を編集・出版している。この『キー・ノート』が一八五五年『マサチューセツ・ミュージカル・ジャーナル』になる。」

五年にボストンで音楽学校の設立を試みて失敗した後、マサチューセツ州のフォールリヴァーに生徒数約五〇〇人の音楽学校を開設した。これは音楽院方式、すなわち等級別クラス分けを採用した学校で、アメリカでこの方式を採用した音楽教育施設はおそらくこれが最初であろう。五年、ロードアイランド州ニューポートに移り、オルガニストを務めるかたわら、音楽の個人教授をした。

「一八五三年、ボストンに音楽学校を設立しようとしたが失敗。後、アメリカ最初のコンセルヴァトリである音楽学校をマサチューセツ州フォールリヴァーに設立。一八五五年ニューポートに転居し、オルガニストとプライヴェートの音楽教師になった。」

一八六一年にイースト・グリニッジ神学校の音楽監督になり、六三年には短期間ながらドイツに音楽留学した。六四年までに同神学校の音楽科はあまりにも大きくなったため、トウルジェーは音楽科を再組織してプロヴィデンス音楽研究所として発足させた。これは後にプロヴィデンス音楽院と呼ばれるようになった。六七年からボストンに住み、同年、ロバート・ゴールドベックと協力してニューヨーク音楽院を設立した。同音楽院は今なおアメリカを代表する音楽院の一つである。

「一八六一年から一八六三年までトウルジェーはイーストグリーンヴィッチ・セナリーの音楽監督になった。このイーストグリーンヴィッチ・セナリーの音楽学部規模が大きくなったところで、一八六四年彼はこれをミュージカル・インスティテュート・オブ・プロヴィデンスに再編成した。一八六七年からボストンに移り、ロバート・ゴールドベック



とともにニュー・イングランド音楽院を設立した。」

（以下の件は手代木の挿入である。ただし、幸田延の留学については中村がすでに詳しく書いている。）

「このニュー・イングランド音楽院には、政府給費留学生第一号である幸田延が留学（明治二十二「一八八九」―二十三「一八九〇」年）している。現在でも多くの日本人が留学しており、また近年はオルガンの主任教授を林祐子氏が勤めるなど日本との関係は深い。」

一八七三年のボストン大学創立と同時に、トゥルジェはその音楽カレッジの学部長に就任し、六九年にはウエスリアン大学から名誉博士号を授与された。

「一八七三年、ボストン・ユニヴァーシティー設立に際し、音楽部長に就任。一八六九年ウエスレニアン・ユニヴァーシティーから名誉博士の称号があたえられた。」

一八九一年四月十二日マサチューセッツ州ボストン没。

「一八九一年ボストンで死去。」

この後、事典にあるトゥルジェーの「著作 (WRITING)」からのそっくりそのままの引用を挟んで、手代木はさらに引用を続ける。

合唱指揮者、オルガニス。

YMCAの指導者でもあったトゥルジェは宗教曲集の編纂や会衆による聖歌の合唱の奨励を通じて教会音楽の普及発展の先頭に立った。

「教会音楽に関しては、オルガニスト、聖歌隊指揮者、讃美歌編集者として活躍した。」

一八六九年と七二年にボストンで行われた平和記念祭で、トゥルジェは大掛かりな合唱団を組織することに尽力した。

「聖歌隊指揮者としてのトゥルジェーは一八六九―一八七二年ボストンのピース・ジュビリーの大聖歌隊への組織化に尽力した。」

ボストンで行われた七七年ムーディー・アンド・サンキー信仰復興運動集会で、トゥルジェーは約二〇〇〇人からなる大合唱団を指揮した。

「そして一八七七年、ムーディー・サンキーのリヴァイヴァル運動がボストンで行われた時、二、〇〇〇名からなる大聖歌隊を指導した。」

次に、事典にあるトゥルジェーの「編集 (EDITION)」をそのまま引用してから、最初に紹介した「トゥルジェーは当時の音楽教育界の重鎮で、アメリカの音楽教育者の組織であるMusic Teachers National Associationの初代会長にもなっている」が続くのである。そして最後に次の言葉で引用を締めくくっている。

熱心なメソジスト派教徒であり、YMCAの指導者でもあったトゥルジェー。

「また、トゥルジェーは音楽家であるとともに、熱心なクリスチャン（メソジスト）だった。」

ここまでが『新グローヴ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」の引用である。したがって手代木はいくら長大であつても引用をきちんと「」に入れ、この箇所<sup>(28)</sup>に注記（レフアレンス）で、項目「Tourjée, Eben」の引用であることを明示しなければならなかったのである。

この後、手代木は事典にない情報を四行ほど挿入している。

一つは、「彼（トゥルジェー）の中では音楽とキリスト教が強く結びついており、彼自身『音楽は、われわれを天国へ導く神の声である』と述べている」と、注にあるとおり、「The Etude」誌から引用している<sup>(29)</sup>。

他の一つは、トゥルジェーは「社会的には、ボストンYMCA、ボストン・ミッシヨナリー・ソサエティ、ノース

エンド・ミッション・ソサエティ等の会長を歴任した」と、死亡記事から引用している。<sup>(83)</sup>

手代木は言及しないが、安田はかつてこう述べた。

「彼（トウルジュー）はまた宣教活動に熱心なメソジスト教徒で、ノース・エンド・ミッションを創設し、ポスト・Y M C A と宣教師会の会長も勤めた」。<sup>(84)</sup> 安田が典拠としたのは、手代木が「エーベン・トウルジューの略歴」の典拠の一つとして注（一七八）に挙げているレオ・イーベン・トウルジューのトウルジュー伝である。

この後、手代木はすでに紹介したように、安田のかつての説を事実引用して、唐突に

「彼（トウルジュー）のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メーソンの日本への派遣が計画され、そして実現したわけである」と述べるのである。<sup>(85)</sup>

トウルジューの伝記的研究は日本では、安田によつてはじめられたばかりである。<sup>(86)</sup>

### 十三 公使が森である可能性を当時の足取りから探る

アメリカ側の資料で困ることは、日本人が肩書きで示されるだけで、名前が出てこない場合である。日本に派遣する音楽教師の推薦をトウルジューに依頼した人物の場合もそうである。

安田はかつて「問題は、引用文中の駐米日本大使（the Japanese Minister to the United States, who was also on holiday）とは誰かである。残念ながら、これを証す史料は入手できていないが、あとで述べる考証から、筆者は森有礼説を提示したい。」<sup>(87)</sup>と述べた。注（一九三）で、実質、手代木がこれを引用すると、「注（二八九）、（一九二）、（一九三）の資料に出てくる the Japanese Minister to the United States, who was also on holiday, a represen-

tative of the Japanese government」<sup>87</sup>、森有礼と考えられる」という表現になる。

これに関して本文で安田の仕事に触れたのは「明治五（一八七二）年トゥルジエーに日本の音楽教育を相談したのは森有礼だった（安田寛説）」<sup>88</sup>という箇所だけで、ここでも安田説の典拠を示さず、注（一八八）で、「唱歌導入の起源について」『山口芸術短期大学紀要』第二五号（平成五「一九九三」年）で論文として発表、などと言うだけで正確に安田の仕事に言及しないので、ここで簡単に触れる。

安田は上記論文の十六頁から十七頁にかけて「七 森有礼説の考証」として、日本公使森有礼説を詳しく考証した。同じことを安田は「日本へ唱歌を導入するためトゥルジエーと会談した日本公使の特定が次に問題になる。筆者は、称号（the Japanese Minister to the United States）と足取りによる消去法によって、それを当時米国に小弁務使として駐在していた森有礼であると推定する。」<sup>89</sup>とも述べた。

この推定の過程で、安田は次のように述べた。

「Eben Tourjeeは、おそらく、叔父、Nicholas Ballの宅で、日本大使に会ったものと推定される。ニコラス・バルは、一八五八年から六九年まで、そして六三年から七二年まで上院議員を勤め、七二年からブロック島の観光開発に乗り出している。そのため、議員や大統領をしばしばブロック島に招待している。」<sup>90</sup>

同じことを手代木は「ニコラス・ポールはカリフォルニアのゴールド・ラッシュで財を築いた上院議員でブロック・アイランド出身、トゥルジエーの叔父にあたる。」<sup>91</sup>と述べる。

推定の過程で、安田は次のようにも述べた。

「一九九二年十月、筆者は手代木俊一氏といっしょに、森有礼のブロック島での足跡を求めて、ボストン、プロビデンス、ブロック島で調査したが、周辺の足跡は発見できたものの、残念ながら、森がブロック島にいたことを証明

する資料は発見できなかった。ただ、上に紹介した資料から推定すると、森がブロック島に滞在したとするならば、八月十日から十二日までの間が最も可能性が高い。<sup>(92)</sup>

頁の指示はないが、一応典拠を示して手代木は、これを次のように引用した。

「筆者は一九九二年十月安田寛氏とともにロードアイランド州ブロック・アイランドと其の周辺を調査したが、森有礼とトゥルジェーが会った資料を見いだすことはできなかった。しかし、当時の地方紙には森有礼の名が見受けられ、それらと『由利公正日記』を総合すると八月十日から十二日間にブロック・アイランドに渡った可能性が強い。<sup>(93)</sup>」

手代木は言及しないが、日本公使を特定するため『子爵由利公正伝』に再録された日記を使って森の足取りをたどった先行研究は安田の上記「唱歌導入の起源について」である。この研究を援助した中村について、安田は「この資料（『子爵由利公正伝』）をご教示くださったのは、近代洋楽史研究家中村理平氏である。<sup>(95)</sup>」と謝辞を述べた。

手代木は、引用なのかどうか曖昧にしたまま、「一八七二年八月六日から十六日までの森有礼の足どり。」をやはり注（一九三）に記載している。

「八月八日 ポストン (National Educational Association のンセプション) に出席」

この先行研究は安田の「一八八二（明治五）年八月九日の Boston Evening Transcript 誌の夕刊の記事には、全国教育会に出席した森有礼についで、Mr. Mori, the Japanese minister to this country, who recieved with hearty applause と呼ばれている。当時、森が駐米日本大使と呼ばれていたことがこれで判る。<sup>(96)</sup>」である。

八月九日から十三日までの足取りの先行研究は、「唱歌導入史に関する資料紹介」にある。<sup>(97)</sup>

最後に、「八月十五日 ニューヨークでグラント將軍と会見」と、唯一安田からの引用でない足どりを記載してい

る。「十五日」は「十四日」の誤りであるが、出典は、「朝十時より森弁務使同道、此地より三十二マイル余なるロングランチといふ納涼場に至り、大統領グランドに面会、暫時対話」(『子爵由利公正伝』四二四頁)である。

ブロック島に森が立ち寄る可能性があったかについて、簡単に述べたい。

八月のはじめ、使節団の一行を見送った後、東部を忙しかけずりまわっていた森有礼は公務の合間のほんの一時、避暑地として有名なブロック島で休暇を取った、とすれば、それは、この小さな島は、森の秘書であった大使館員ランマンが写生によく訪れていたというから、彼の案内だったに違いない。さらにトウルジェーの叔父、ニコラス・ポールはブロック島にホテル (Ocean View Hotel) を持っており、日本公使館員も利用していたというから、森のブロック島滞在は、秘書ランマンを通じてのニコラス・ポールの招待であったのかもしれない。<sup>(98)</sup>

これまで使われたことのない新しい資料で考証を補足しておく。<sup>(99)</sup>

「日本の音楽教育 (musical system) の最近の改革は、音楽院の創設者と日本の教育理事官 (the Japanese Commissioner of Education) とのニューイングランドの避暑地 (summer resort) でのくつろいだ会話が発端となつて発展したものであった」<sup>(100)</sup>。

## まとめ その一

これまで述べた研究史から、『岩波キリスト教辞典』の項目「唱歌と讃美歌」にある、「(四) 日本政府の依頼を受けた当時の音楽教育の重鎮であるE・トウルジェーは伝道の意志を持つメイソンを派遣した。」の件の研究史を整理しておく。

おぼく、典範を年代順に整理しよう。

- 1) "When I was applied to by the Japanese embassy to recommend the best man for introducing the culture of vocal music into the public schools of Japan, I told them there was but one man of my acquaintance who could accomplish it, and that was Prof. L. W. Mason. They thankfully accepted my suggestion, and transferred my friend to the field." (1885)
- 2) "The late revolution of the musical system in Japan grew out of a casual chat between the founder of the Conservatory and the Japanese Commissioner of Education at a New England summer resort." (1889)
- 3) "and afterwards they sent to Dr. Tourjée to send someone out to teach music and he sent Dr. Luther Mason"(c.1907)
- 4) "One summer he met a representative of the Japanese government, when they were both seeking rest, and so interested him that later it was arranged that a member of the Conservatory faculty, Mr. Luther W. Mason, go to Japan and introduce his method into its thirty thousand schools." (1913)
- 5) "On Aug. 3 Mr. Megata, from Tokio, gave a lecture on "Educational relations of Japan." His presence at the session indicates that Dr. Tourjée in 1877 may have already interested himself in the enterprise which two and a half years later sent Luther W. Mason, a member of his summer faculty, to Japan there to revolutionize its music." (1934)
- 6) "Returning from a lecture trip in early August, 1872, Eben joined his family at Block Island,

where they were staying with Uncle Nicholas and Aunt Alenda Ball. Here at the Island, Eben met Japanese Minister to the United States, who was also on holiday. From this chance meeting, interesting plans materialized Mr. Luther W. Mason, a Conservatory faculty member, was sent to Japan, and during his four year stay, Mason introduced the New England Conservatory Method of Voice Instruction to some 30,000 schools of the Japanese Empire." (c.1960)

野上は、資料1)の日本語訳によつて、メーソンが来日した理由の一つとしてトゥルジェーによるメーソンの推薦を指摘した。

中村は、トゥルジェーによる推薦こそが「メーソンの日本招聘に重要な役割を演じ」、推薦を依頼した人物は、「確証は見当たらないまでも田中不二麻呂以外には考えられない」、時期については、「多分ニューヨークに到着した際にこの件の要請を当時の吉田清成在米特命全権公使に申し出たのではなからうか」と、田中がフィラデルフィアの万国博覧会で渡米した一八七六(明治九)年のこととした。

安田は、資料6)にもとづいて、推薦した人物は森有礼であり、時期は一八七二(明治五)年八月であるとした。手代木は、資料4)によつて、安田説を補強した。

以上の研究史を無視するかのように手代木は、「日本政府の依頼を受けた当時の音楽教育の重鎮であるE・トゥルジェーは伝道の意志を持つメーソンを派遣した」と記す。

ここでは二つの点を問題にする。一つは、トゥルジェーが「メーソンを派遣した」のかどうか、他の一つは、トゥルジェーが「日本政府の依頼を受けた」のかどうか、である。

六つの資料の中で、トゥルジェーがメーソンを派遣したと述べているのは資料3)のみである。したがって、トゥル



ジェーが「メーソンを派遣した」とする手代木説が典拠に出来る資料は3)のみである。しかもこの資料はジェニー・コンドンがずっと後になって記した回想記(タイプ原稿、未発表)で、他の資料に比べて信頼性があるとはとても言えないものである。すべての資料を比較するなら、資料1)でトゥルジェー自身が語っているように、トゥルジェーはメーソンを推薦した、というべきであろう。

トゥルジェーが「日本政府の依頼を受けた」のかどうかについては、一八七二(明治五)年の場合と、一八七六(明治九)年あるいは一八七七(明治十)年の場合とに分けて考察しなければならない。

一八七二年の場合は、資料1)が提案と言い、資料2)がくつろいだ会話と言い、資料4)が避暑地での出来事と言い、資料6)が偶然の出会いと言っていることから判断すると、たまたま及んだ話題であって、とても日本政府からの依頼というほどのものではなかった、と考えるしかない。

一八七六(明治九)年あるいは一八七七(明治十)年の場合は、アメリカ側の資料は何も語らず、日本政府あるいは文部省が依頼するとすれば、目賀田種太郎が伊沢修二と連名で行った、一八七八(明治十一)年四月八日付けの有名な上申書以降でなければならぬので、中村が言うように「日本側の記録に音楽教師紹介についての記述が見当たらないのは、この要請が正式のものではなく、田中の打診的な要請であったからではなからうか」というのが正当なところで、せいぜいやはり中村が言うように、「日本政府筋の要望があつて、トゥルジェーがメーソンを音楽教師として推薦していた」と言える程度のものであろう。

したがって、トゥルジェーが「日本政府の依頼を受けた」とか、「メーソンを派遣した」というのは、資料も研究史も無視した、根のない言説だとしか言いようがない。

研究者がいろいろな必要から最初に参考にするリファレンスブックである辞典に、このような根拠のない言説が載

り、仮に流布するようなことがあるとすれば、当該研究にとつてはまことに迷惑なことである。

## 註

### (1)

手代木は著書『讀美歌・聖歌と日本の近代』の「あとがき」で、「本書は、中村理平氏から提供された資料、そして助言なしではとうてい成り立たなかつたであろう」、「これまで続く彼(安田)との資料・情報・アイディアの交換がなければ、本書は成立しなかつたろう」と述べている。また、赤井は、『オルガンの文化史』の「あとがきと自分のこと」で、「洋楽史研究会の皆様にも大変お世話になった。とくに安田寛、手代木俊一両氏は快く貴重な情報を提供してくださつたし、肩書きのない一介のライターのために多方面に紹介の労をとつてくださったことは本当に感謝している。しかし洋楽史研究に大きな業績を残された中村理平先生が突然、亡くなられたことは私にとつて大きなショックだった。(中略)すべてを一次史料から調べ、何でも丁寧に答えてくださるので、これからの研究方法についていろいろ教えを受けようと思つていた矢先だつただけに、悲しくて仕方なかつた。」と述べている。洋楽史研究会については注四〇を参照。

### (2)

手代木俊一氏の論文は、レファレンス(典拠、出典、引用箇所の指示)があまりにも不備であるため、忌憚らない批判をさせていただきますが、それはあくまで研究史を正確に記述するという學術研究上の要請から出たことで、他意はまったくなくことをご理解いただきたい。われわれの共通の友人であり、また、師でもあり、われわれの研究に援助を惜しまなかつた故中村理平先生について、「存命であつたら、かえつて怖くてお見せできなかったかもしれない」とお書きになっていることが真意であるなら、私の真摯な批判を受けとめ、真摯に対応してくれるものと信じて疑わない。中村先生はかつて「僕の夢は、日本の洋楽史がひとつの学問領域として確立されることです」とおっしゃつた。「それは(中略)大勢のひとがさまざまな角度で研究に取り組み、公表して批判を乞ひ、修正されていく、こうした行為の積み重ねではじめて成立するものだと思います」ともおっしゃつたことを手代木氏もわたしも直に聞いている。手代木氏に対する私の批判は、中村先生の遺志を少しでも継いでゆく責任を果たすための過程の一つだと理解していただきたい。

### (3)

中村理平『洋楽導入者の軌跡―日本近代洋楽史序説』刀水書房、一九九三年、四五二頁、注六七。

### (4)

同前、四三〇頁。

### (5)

越川美都子「明治初期讀美歌研究―『七二雜報』の記事を中心に―」東京芸術大学学理科卒業論文、一九九二年、五二頁。

- (6) 手代木俊一「横浜と唱歌―明治初期讃美歌について」『礼拝と音楽』七十号、一九九一年、四〇―四七頁。
- (7) 「學術奨励賞授与式」讃美歌の研究で著書を発表された手代木俊一氏に理事長より賞状と賞金が授与された。賞 手代木俊一殿 あなたは日本讃美歌史の研究を続け、著書『讃美歌・聖歌と日本の近代』を著すなど顕著な業績を上げました。よってここに賞を贈り今度の研究の発展を期待いたします。二〇〇〇年九月一六日 キリスト教史学会理事長 荒井献『キリスト教史学』第五五集、二〇〇一年七月、二七一頁。
- (8) 尾崎宏「書評手代木俊一著『讃美歌・聖歌と日本の近代』」日本英学史学会「日本英学史学会報」九十一号、五月一日、二〇〇〇年、五頁。
- (9) 手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』音楽之友社、一九九九年、一五五―一五八、一七三頁。この内、一五五頁から一五八頁までの記述は、手代木俊一「19世紀アメリカの宣教と音楽」の九三頁から九七頁の記述を転載したものである。手代木俊一「19世紀アメリカの宣教と音楽」『人文科学研究（キリスト教と文化）』国際基督教大学キリスト教と文化研究所、一九九九年。
- (10) 越川美都子、同前、四八―四九頁。
- (11) また、そのような越川であったから、論文の最後で、「各派の宣教師が本国へ書き送ったミッシヨナリー・レポートの類（中略）も未見である。音楽としての讃美歌受容という視点からこれらを調査していくことが私の今後の課題である。」と、一九九四（平成六）年から同志社大学人文科学研究所第二研究A班「宣教師文書の研究」ではじまった研究、その年度の研究所報が「本年度特筆すべきは、これまでの研究領域に讃美歌・西洋音楽部門を加えたこと」であるという研究を予告することができたのであろう。
- (12) 「メーソンの〈音楽と宣教〉とあまりにも漠然とした表現を、手代木は後に、「メーソンとキリスト教、唱歌と讃美歌」と言い換えている。手代木俊一「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」『よくわかるキリスト教の音楽』キリスト教新聞社、二〇〇〇年一〇〇頁。手代木が「宣教」と言うときは、キリスト教宣教、特にキリスト教海外伝道の意味であり、「音楽」は讃美歌を指す場合と、「唱歌」を指す場合の二通りの意味で使っている。となると、キリスト教讃美歌とキリスト教海外伝道とは、手代木の表現で言えば、不可分であることは、とりたてて言うほどのことでもない。他方、日本の「唱歌」と日本におけるキリスト教伝道が不可分であるかは、注目をひく論題となる。手代木の論述の主眼はこちらにあり、彼の評価もこれに関係している。
- (13) 越川の研究からのこの引用は、『よくわかるキリスト教の音楽』に転載され、ここでも越川の論文への言及はない。手代木俊一、「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」、同前、二〇〇〇年、一〇〇―一〇一頁および一二七頁の注一七。

(14) 安田寛「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」『山口芸術短期大学研究紀要』第二十四巻、一九九二年、一五頁、一七頁。  
(15) 越川、同前、四八頁。

(16) 手代木『讃美歌・聖歌と日本の近代』同前、一五六頁。

(17) 越川美都子、同前。なお研究の現在の到達点からすれば、七一雑報のこの記事は、メーソンからの情報によって書かれたと推測してもほぼ間違いはないが、これについては後に詳述する。

(18) 手代木、前掲書、一五七頁。

(19) 手代木、前掲書、一五八頁。

(20) この実質、越川の研究からの引用は、手代木俊一「一九世紀アメリカの宣教と音楽」(同前)の九三―九七頁を転用したものである。

(21) 手代木、『讃美歌・聖歌と日本の近代』同前、二二二頁の注一三三、二二六頁の注一六八。

(22) こうした無駄について、「国内の諸文献には所論の典拠が提示されていないものが珍しくない。基礎的な研究史の整理に不可欠な、依拠資料の割り出しには法外な時間がかかった」と書いたのは、他でもなく、手代木が親しくしていた中村理平であった。その中村は後学の便宜と研究の透明度を高めるために、指導教官の反対を押して、自分が発掘した資料でさえも著書で所蔵先まで記したのである。

(23) 野上俊之「L・W・メーソンの音楽教育観について」純心女子短期大学紀要、第十五集、一九八〇年、四二(五三)頁。

(24) 中村理平「洋楽導入者の軌跡」(同前)四九九頁の注七七。

(25) 同前、四八二―四八三頁。

(26) 同前、四九八頁の注七六。

(27) 再引用に注記して手代木は、「この資料は『附録 学校唱歌ノ必要 米國新英蘭士音楽院長 イーベン・トゥルジェー氏』『風琴修覆及取扱法』(白井規矩郎著 同文館 明治三十「一八九七」年四月)にも再録されている。赤井励氏にご教示いただいた。この『風琴修覆及取扱法』(白井規矩郎著)の附録には「音楽談 伊沢修二述」も含まれている。」と言うが、これは安田がすでに述べた「次の資料は資料(4)を付録として再録したものである。この再録あとに伊沢修二述「音楽談」が続いているから、再録の助言は伊沢修二からでたものかもしれない。そうだとすると、伊沢修二は唱歌導入の発端について知っていたことになり、彼が、唱歌導入についてのべたどの文章にもこのことに触れていないことと合わせて、注目される。なお、この資料は、オルガ

- ン史研究家、赤井勵氏が発見されて、筆者にご教示下さったものである。(5) 米国新英蘭土音楽院長イーベン、トルジェー氏「附録 学校唱歌ノ必要」、白井規矩郎『風琴修覆及取扱法』所収、東京、同文館、一八九七」を引用したものである。安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」、『山口芸術短期大学研究紀要』第二十六巻、一九九四年、九一〇頁。したがって、この件では、中村からの引用に安田からの引用を注記する形で、引用が二重に隠れている。
- (28) 手代木、前掲書、一八六頁。
- (29) 同前。
- (30) 同前、二二九頁の注一八六。
- (31) 手代木の著書が出る一九九九年までに、中村、安田、赤井、平高、そして手代木によつてトルジェーについての多くの稿が書かれている。そして、トルジェーについての研究が急に増えたのは、本稿で述べたように、中村がトルジェーの重要性を指摘してからであった。
- (32) 手代木、前掲書、一八七頁。同じ件を、手代木俊一「讃美歌・聖歌と日本の近代」『キリスト教史学』(第五十五集、二〇〇一年) 九八頁では、「このメーソンの日本派遣は、明治五年当時のアメリカ公使森有礼が日本政府を代表してトルジェーに要請これに應えて決定されたものだ」と、歴史的事実を無視した、かなりいい加減な表現に変わる。日本公使はトルジェーへ音楽教師派遣を要請したのではなく、この時、メーソンの日本への派遣が決定されていたのではない。さらに日本政府を代表していたことを裏付けるような資料はない。
- (33) 同前、一八七―一八八頁。原文は以下の通り。“Returning from a lecture trip in early August, 1872, Eben joined his family at Block Island, where they were staying with Uncle Nicholas and Aunt Almenda Ball. Here at the Island, Eben met Japanese Minister to the United States, who was also on holiday. From this chance meeting, interesting plans materialized. Mr. Luther W. Mason, a Conservatory faculty member, was sent to Japan, and during his four year stay, Mason introduced the New England Conservatory Method of Voice Instruction to some 30,000 schools of the Japanese Empire.”
- (34) 安田寛「唱歌導入の起源について」、『山口芸術短期大学研究紀要』第二十五巻、一九九三年、一五頁。
- (35) 手代木はこの実質中村からの引用を後に、手代木俊一「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」(同前)の一〇八一―〇九頁に少し表現を修正して転用している。
- (36) 手代木、「讃美歌・聖歌と日本の近代」(同前)一八六頁、一八八頁。

(37) 中村、前掲書、四八三頁。手代木の表現が「推薦」から「派遣」に変わる過程については、注七一を参照

(38) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 一二頁。

(39) Tourjée, Leo Eben, "For God and Music, the Life Story of Eben Tourjée, Father of the American Conservatory," *Los Angeles*: unpublished typescript, c1960, p. 306.

(40) この後、この講座を企画した松下氏の提唱で、研究のさらなる進展を期待して講座の講演者(手代木俊一、エヴァルト・ヘンゼラー、中村理平、安田寛)を会員として、中村理平を中心に近代洋楽史研究会を発足した。会中は中村の考えを反映して、研究のフェアな発展のため、お互いに発掘した資料を公開していた。会中は中村理平の他界で自然消滅したが、それまで会誌一号を発行し、洋楽史年表一一六八項目を準備した。

(41) 「本書におさめられた論考の底辺にあるテーマに最初に触れたものであり、その中で数々の問題提起を行った」として手代木が再録した内容、特に「小学唱歌集」成立の謎」と安田の「キリスト教宣教師が日本の唱歌成立に果たした役割―その歴史的検証」中の「唱歌作曲家の謎」「小学唱歌集成立過程の謎」「唱歌成立過程の謎」とを比較すれば、内容がほぼ重なっていることが分かることだけをここでは指摘しておく。『洋楽史再考』プロバピリスⅢ、国立音楽大学、一九九三年。

(42) Sadie, Stanley, ed. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. Vol.19: Macmillan Publishers Limited, 1980. pp. 94-95. おなじ著者による同じ項目が『新グローヴアメリカ音楽事典』にもある。H. Wiley Hitchcock, Stanley Sadie, ed. *The New Grove Dictionary of American Music*. Vol.4: Macmillan, 1981. pp. 404-405. メーソンが日本にいたのは正しくは一八八〇年から一八八二年までである。また、『ニューグローヴ世界音楽大事典』(第十一巻、四五六頁)の「トゥルジェ、エバン」の項目で当該箇所を「また七九年から八二年にかけては、ルーサー・ホワイティング・メーソンの求めに応じて、日本の学校に西洋式音楽教育を導入する教師団の手配に奔走した」と翻訳するのは明らかに誤訳である。トゥルジェは音楽院の教師団を手配したのではなく、教師団の1人であったメーソンを手配したのである。

(43) "When the Music Teachers National Association was organized in 1876 he served as its first president, and he initiated arrangements for Luther Whiting Mason of the New England Conservatory faculty to introduce Western music education into the schools of Japan between 1879 and 1882."

(44) 手代木、前掲書、一八八頁。ただし、項目「Tourjée, Eben」には、トゥルジェーがメーソンを日本に派遣したとは書いてない。メーソンが日本に西洋音楽教育を導入するための手配をはじめた、と書いてある。

- (45) Samuel, E. I. "A Life Sketch of Eben Tourjee." *New England Conservatory Review* iii/2(1913), 1; repr. in *Alumni Opus* [of *New England conservatory*] (1951), 12.
- (46) 手代木、前掲書、一八八頁。
- (47) 原文は以下の通り。"This part of his mission assumed an international character. One summer he met a representative of the Japanese government, when they were both seeking rest, and so interested him that later it was arranged that a member of the Conservatory faculty, Mr. Luther W. Mason, go to Japan and introduce his method into its thirty thousand schools." 手代木は、トールジェーがメーンソンを日本に派遣したと翻訳しているが、正しい訳ではない。
- (48) 『座談会』幕末から明治初期のキリスト教音楽と日本人、新資料による音楽取調掛前史の研究、『洋楽史再考』(同前) 九五頁。
- (49) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(同前) 四六一頁。
- (50) 同前、九五―九七頁、中村、同前、四六一―四六四頁。
- (51) 安田『唱歌導入の起源について』(同前) 一八頁。「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 九頁。
- (52) Coburn, Frederick W. "Eben Tourjee." *Lowell Courier-Citizen*, Saturday, June 6, 1934.
- (53) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 一三頁。注四〇で述べたように、この頃、洋楽史研究会として発掘した資料を共有して研究を進めていた。この論文では、手代木が発掘した資料については、その旨本文で断り書きを記入している。
- (54) 手代木、前掲書、一八九頁。
- (55) 同前。
- (56) Coburn, Frederick W. "Eben Tourjee." *Lowell Courier-Citizen*, Friday, May 25, 1934. 関係資料の中で、トールジェーがメーンソンを派遣したと述べているのは、ジェニー・コンダンの回想記のみである。彼女は実際には二年半しか日本にいなかったメーンソンが日本に五年間住んでいたと述べるなど、記憶はかなり曖昧である。トールジェーがメーンソンを日本に派遣した、という手代木の説はジェニー・コンダンの回想記を典拠としたこととなる。
- (57) "On Aug. 3 Mr. Megata, from Tokio, gave a lecture on "Educational relations of Japan." His presence at the session indicates that Dr. Tourjee in 1877 may have already interested himself in the enterprise which two and a half years later sent Luther W. Mason, a member of his summer faculty, to Japan there to revolutionize its music." Coburn, *ibid.*, Tuesday, June 12, 1934.

- (57) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 一五頁。
- (58) 手代木、前掲書、一八九頁。
- (59) 同前、一九〇頁。
- (60) 安田、同前、一五頁。安田寛「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」『山口芸術短期大学』第二十九巻、一九九七年、一頁。
- (61) 安田寛「唱歌の起源」同前、二頁。
- (62) 中村、前掲書、四八三頁。
- (63) 同前、四三〇、四九九頁。中村が「ハーバレー『博士論文』(八五頁所収)『Ten Minutes in a Boston School Room』『Wide Awake Pleasure Book』I, No. 6 (June, 1876) より」として引用したメーソンの授業風景を手代木はさらに引用した。手代木、前掲書、二三八頁。
- (64) 中村、同前、四三八頁。
- (65) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 一八頁。
- (66) 安田寛「唱歌導入の起源について」(同前) 一六頁。
- (67) 同前、一八頁。これを実質引用した手代木は「当時のアメリカで公立学校に音楽の授業を導入する理由に、月曜から金曜まで基礎的な音楽の技術を取得させ、日曜の礼拝で奉仕できる人材を育てることがあった」と述べる。手代木俊一「日本の讃美歌・聖歌と唱歌をめぐる」『別冊歴史読本 日本「キリスト教」総覧』吉成勇編集、第二十一巻一号、事典シリーズ二十六、新人物往来社、一九九六年、七三頁。これは、手代木俊一「日本の讃美歌」『音楽理論研究』(ソウル大学音楽学部西洋音楽研究所、一九九八年)の二五八頁に転用され、さらに書き換えたものが次のように転用される。「ボストンでは、日曜の礼拝に奉仕できる人材を育てるために、月曜から金曜まで基礎的な音楽の技術を取得させるという理由で、公立学校の授業に音楽の科目を導入すべきであるという意見があった」。手代木俊一「ジョージ・オルチン師とL・W・メーソン―オルチン書簡を通して―」『音楽の宇宙―皆川達夫先生古希記念論文集』皆川達夫先生古希記念論文集編集委員会編、音楽之友社、一九九八年、三〇八頁。
- (68) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」同前。
- (69) 手代木、前掲書、一七九頁。
- (70) 同前、一九二頁。



(71)

一九九三年から一九九五年にかけて安田が展開した説を手代木が最初に引用したのは、「日本の讃美歌・聖歌と唱歌をめぐって」(同前)の七四頁である。「明治五年、彼の伝道の目が海外にむけられたとき、日本政府から音楽教育のお雇外国人幹旋の要請を受け、それにこたえてL・W・メイソンを推薦している。トウルジェーに依頼したのは当時駐米公使だったクリスチャンの森有礼で、この会談は岩倉使節団がボストンからロンドンに向かった直後の八月、ロードアイランド州プロック・アイランドのことだった。トウルジェーの中では音楽とキリスト教は強く結びついており、彼自身「音楽は、われわれを天国に導く神の声である」と述べている。彼にとつてキリスト教化と西洋音楽の導入はイコールであつた。しかし、この時期日本はキリスト教は禁教であり、すぐにメイソンを日本に派遣することは不可能だった。実際にメイソンの来日が実現するのは、この計画の八年後のことである」(傍線の件は安田の研究に手代木が挿入した件)。この安田の研究を長々と引用した件を手代木は「日本の讃美歌」(同前)の二五八頁にほぼそのまま転用している。さらに冒頭の行を手代木俊一は、「ジョージ・オルチン師とL・W・メイソン・オルチン書簡を通して」(同前)三〇八頁で「彼のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メイソンの日本への派遣が計画され、そして実現したわけである」と、「19世紀アメリカの宣教と音楽」(同前)八五頁では、「彼のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メイソンの日本への派遣が計画され、そして実現したわけである」と、「讃美歌・聖歌と日本の近代」『キリスト教史学』(同前)九七頁では、「彼のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メイソンの日本への派遣が計画され、そして実現した」と、次々に転用をくり返す。さらには「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」(同前)一〇六頁に転用される。「彼のキリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、日本政府から音楽教師派遣要請を受け、メイソンの日本への派遣が計画され、そして実現したわけである」と、「日本政府から音楽教師派遣要請を受け、メイソンの日本への派遣が計画され、そして実現した」と、歴史的事項に関しては山口芸術短大の安田寛氏のご教示をうけた」と極めて曖昧な言及があるのみである。これが言うならば手代木が安田の研究を引用した系譜である。また引用の過程で、メイソンを推薦したはずのトウルジェーが、メイソンを派遣したことに変わっている。

(72)

「メイソンより目賀田種太郎宛書簡」『音楽取調掛時代(明治十二年〜明治二十年)所蔵目録(3)各種資料篇』東京芸術大学附属図書館、一九七一年、一三一―一五頁。

(73)

安田寛「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」『山口芸術短期大学研究紀要』第二十四巻、一九九二年、一三一―一四頁。

(74)

手代木「讃美歌・聖歌と日本の近代」(同前)二〇四頁。

(75) 安田の研究から引用したはずのこの件は、手代木俊一「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」(同前)一二三―一二四頁に転用されている。

(76) Brige, Edward Bailey. *History of Public School Music in the United States*. Washington, D. C.: Music Educators National Conference, 1966. pp. 230-232.

(77) 手代木『讚美歌・聖歌と日本の近代』(同前)一七九頁。実質『新シローヤ音楽・音楽家事典』の項目「Tourjée, Eben」から、ハウの博士論文からの引用の最初は、手代木俊一「日本の讚美歌・聖歌と唱歌をめぐって」(同前)七四頁で、「ハーゲン・トゥルジューは、アメリカの音楽教育者の組織であるMUSIC TEACHERS NATIONAL ASSOCIATIONの初代会長(副会長の一人にL・W・メイソンがいる)に就任するなど音楽教育者として著名」というものである。これは「日本の讚美歌」(同前)二五八頁に転用される。さらに、「ジョージ・オルチン師とL・W・メイソン―オルチン書簡を通じて」(同前)三〇八頁で、その表現を変えて「トゥルジューは当時の音楽教育界の重鎮で、アメリカの音楽教育者の組織であるMUSIC TEACHERS NATIONAL ASSOCIATIONの初代会長でもなっている。この時の副会長のひとりにはL・W・メイソンがいる」と転用される。これは「19世紀アメリカの宣教と音楽」(同前)八五頁と「特別寄稿―唱歌のルーツと賛美歌」(同前)一〇六頁「讚美歌・聖歌と日本の近代」(同前)九六頁に転用される。

(78) “The first officers of the M. T. N. A. would all be leading music educators in the last quarter of the nineteenth century: Dr. Eben Tourjée, president; Theodore Presser, secretary; G. M. Cole, treasurer; and William Smythe Babcock Mathews, N. Coe Stewart, Fenelon B. Rice, Program Committee. Twelve vice presidents were selected and Mason was the vice president and representing Massachusetts. The vice presidents formed a committee to assist the president and further the interests of the association in their own state.” Howe, Sandra Wieland. “Luther Whiting Mason: Contributions to Music Education in Nineteenth-Century America and Japan.” Ph. D., University of Minnesota, 1988. p. 64. Howe, Sandra Wieland. *Luther Whiting Mason: International Music Educator*. Warren, Michigan: Harmonie Park Press, 1988. p. 54.

(79) ビルジューの著作からはすでに安田が「トゥルジューは(中略)一八七六年の全国音楽教師会の初代会長にも選ばれている」と引用している。安田寛「唱歌導入の起源について」(同前)一五頁。

(80) 手代木『讚美歌・聖歌と日本の近代』(同前)一七七一―一七九頁。

- (81) 中村『洋楽導入者の軌跡』(同前) 五四四頁。
- (82) 「第三章 音楽と宣教」『讚美歌・聖歌と日本の近代』でもっとも紙数を費やしているトウルジェーの経歴についてこういった浅い研究が、トウルジェーの宣教思想を語る手代木の言説に致命的とも言える欠陥となつて働いていることについては後に触れる機会があるであろう。また、『新グロウヴ音楽・音楽家事典』の項目「Toultée, Eben」の引用は、要約して、『讚美歌・聖歌と日本の近代』(同前) 九六頁に転用されている。しかも、そこでは『新グロウヴ音楽・音楽家事典』は出典としてどこにも記載されていない。
- (83) 手代木が典拠としている死亡記事には、次のように書かれている。“For several years he was president of the North End Mission and president of the Boston Missionary Society, and in 1871 he was president of the Boston Young Men's Christian Association.” anonymous. “Obituary.” *Zion's Herald*, 15, April, 1891.
- (84) 安田寛「唱歌導入の起源について」(同前) 一五頁。
- (85) 以上のトウルジェーの略歴の件は手代木俊一「讚美歌・聖歌と日本の近代」(同前) 九六―九七頁に転用されている。
- (86) 安田寛「イーベン・トウルジェーの伝記的研究」『弘前大学教育学部紀要』第八十四号、二〇〇〇年、六十五―八十頁。
- (87) 安田寛「唱歌導入の起源について」(同前) 一五頁。
- (88) 手代木、前掲書、一八七頁。
- (89) 安田寛「唱歌導入史に関する資料紹介」(同前) 十頁。
- (90) 同前、一一―一二頁。
- (91) 手代木、前掲書、二四〇頁。
- (92) 安田、同前、一一頁。
- (93) 手代木、同前。
- (94) 安田寛「唱歌導入の起源について」同前、一七頁。
- (95) 安田「唱歌導入史に関する資料紹介」同前、一〇頁。
- (96) 同前。なお、その注で安田は、「この記事は、現在ボストンに留学中の手代木俊一氏から筆者に送られてきたものである。この記事はまたこれまで知られていなかった森有礼の足跡を、一つ明らかにするものである。」と述べた。当時、手代木は、偕成会から平成二年度学術奨励金の交付を受けて、一年間の予定で、ボストンに滞在中であった。

- (97) 八月九日に関しては、同前二〇頁、八月一〇日から一二日に関しては、同前二二頁、八月二三日に関しては、一一頁。
- (98) 「3 ノロックス島と日本公使館員」同前、一一―一二頁。
- (99) Wright, Rev. M. Emory. "Musical Training in America." *The Musical Herald*, February 1888, 46.
- (100) "The late revolution of the musical system in Japan grew out of a casual chat between the founder of the Conservatory and the Japanese Commissioner of Education at a New England summer resort."